

三尾砂先生の文法研究

『青葉学園四十年誌』
(青葉学園昭和六一年)

菅野 宏

(福島大学教授)

『話言葉の文法』の初版は昭和十七年(一九四二)に出ました。戦争が終ってしばらくして、学校劇の研究と運動のうちこんでいた富田博之といっしょに青葉学園をたずねてから、しばしばおじゃまするようになっていたわたくしは、日本語の勉強をするつもりでいながら、その本を持っていなかったのですが、はずかしく思っておりました。二十三年ごろ桑原君という学生が二本松の本屋に出ているというので、早速それを買ってもらいました。もちろん桑原君がわたくしに譲ってくれたわけですが、たいそううれいしい思いをしましした。いまその本はかなりぼろぼろになってしまいましたが、だいにしまつてあります。

戦争で、おちついてろくろく本も読めなかつたのですが、そのころになって、ようやくいろいろ勉強することができるようになりました。いまでこそ、現代の日本語や話言葉の研究書は数多く出るようにはなりましたが、その当時までは数えるほどしかありませんでした。もちろん研究者もほとんどいませんでした。ただ、神保格『話言葉の研究と実際』(一九三二) 佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』(一九三六) 同『音声と言語』(一九三九)、同『現代日本語法

の研究』(一九四一)は、そういう不毛の原っぱのなかにそびえるりっぱな山々でした。すでに日本音声学会の活動がはじまり、ソシユールの『言語学原論』の翻訳紹介もあって、音声言語が言語研究の基本であることが理論的にもかなり浸潤しはじめていたのが、戦争前の状況ですが、そのとき、佐久間鼎の本に続いて、『話言葉の文法』が出版されたわけです。

場と言葉遣・言葉遣の構造と文体などの総論的なものから、話しことばにおける動詞および形容詞、「だ・です・ます・ございます」の用法・文の内部および敬讓法における丁寧さの表現、女ことばなどの問題を扱っている。……問題の提示・新分野の開拓という意義はきわめて大きい。(『国語学辞典』)

これは、三尾先生の本に対する解説として当然の評価ですが、しかしまだ解説として不十分なところもあります。従来の研究は、現代語とくに話しことばを対象としてとりあげること因習的にしてこなかつたうえに、ことばの研究のしかたそのものが因習的であるか、欧米直訳の借りものであるか、そんなところであって、ことばの現実に根ざしたほんとうの研究ではありませんでした。わずかに九州大学に日本のゲシュタルト心理学研究の基地をつくり、言語行動の体制についても研究業績をつみかさねていた佐久間鼎博士が、因習や借りものの域をぬけ出た日本語の事実を続々指摘されていたところに希望が見えていました。

三尾先生の最初の著作である『話言葉の文法』は、まさに佐久間鼎の文法の考え方を受けつぎ発展させたものにほかなりません。従って、この本の主眼は、総論的にわずかしは触れられていなかったにしろ、「場」とことばづかいの關係にあります。「場」「場面」「トポス」というのは、言語主体と刺戟布置・環境の全体的關係をさし

ます。『国語学辞典』の解説にはこの環境条件と言葉・文法との関係という重要な視点が見落されています。本のなかに述べられた会話・敬語の法則、省略中止などについての場の考察からみちびきだされた事実(たとえば「半終止」、丁寧さによる文体形のレベルの設定、丁寧さの統計的な処理など、すべて当時のあたらしい心理学的事実「行動体制」「行動の構造―結構―」などが土台にあつて、はじめて指摘できることでした。いま学校の国語科教育で、「常体・敬体」などといつて教えている事実は、すべて三尾先生の、「だ」体・「です」体・「ございます」体の文体のレベルをいいかえたものにすぎません。それは、『国語学辞典』の「敬体」の頂を読めば、『話言葉の文法』のなかみがつくり要約され利用されていることで納得のいくことです。

あとでうかがったことですが、『話言葉の文法』は、「文に於ける陳述作用とは何ぞや」(東京大学国語国文学会『国語と国文学』一七七号昭一四―一九三九)という最初の文法論に関する論文を書かれてから、病氣療養のあいまに『戯曲全集』からデータをとりながら、構想叙述されたものだということでした。平易で淡々とした文章のなかに、学問上のたたかいと病氣に対するたたかいたが あつたことを知って、そのときの感動がいまなおつよく呼びおこされます。たくさんの論文をおかきになり、国語教育・ローマ字教育にもうちこんで、つぎに出版されたのが、『国語法文章論』(三省堂、昭和二十三年―一九四八)です。これは、『話言葉の文法』でとおつておかれた、文章論の問題を一気にかきあげられた、理論の本です。佐久間鼎をうけついで、「文」という言語上の単位を、従来の単文複文重文式の分類でもなく、また平叙文疑問文感嘆文命令文式の分類でもなく、文が成立する場から、全くあたらしい分類をこころみ

たもので、「場の文」(現象文)・「場をふくむ文」(判断文)・「場を指向する文」(未展開文)・「場と相補う文」(分節文)という四分類がそれです。この発見と提案は、従来だれも気がつかなかつた、整然とした感動的なもので、もちろん、学界のひとびとを驚かせました。日本語の文のもつ特質がみごとにとり出されたこの考え方は、この本が出てすでに三十年を経過したままでも、そのかがやきがすこしもおとろえておりません。しかし残念なことに、日本語の文の成立する場、条件の総体といった抽象的な考え方は、因習にとられた国語学研究者の習熟していないもので、文の意味のもつ論理的な側面・日常的な感じ方との間に、なじまないものがあると考えて、せつかくのすばらしい文の分類がその後すこしも発展的にうけとめられておりません。佐久間・三尾ライン上にあるといわれる故三上章の多くの文法研究書でも、理論は論理的側面にかたむき、心理学的なダイナミックな面はかえってほかされているように見えます。三尾先生のしごとを継承することは、いそがなければならぬと思っております。

戦争が終つてわたくしが考えうけとつていた、三尾砂文法は、実はもつとほけーつとしたもので、ふるい文法上の知見と、あたらしいそれとをつきあわせて考えるのにあたふたしておりました。いま思うとはずかしいかぎりです。『国語法文章論』のおしごとのあと、たくさんの論文をおかきになり、考えをさらに深めていらつしやいます。わたくしは怠けものでぐずぐず悩んでばかりいたので、文法研究の論文は五つかいただけにとどまっております。八郎さんがなにか書くようにというので、とりあえず先生のおしごとのうちの文法研究の面でいま思っていることを、意をつくしませんがわたしなりの思いをこめて書いてみました。